704
講談社現代新書

性格分析

小川捷之

神経質な人は、きちょうめんで思慮深いが、苦労性、くよくよ考えこみがちである。いわゆる外向的な人は、明朗活発で行動力に、小心で

あふれているが、短慮軽率とも評される。性格は一面的にとらえることはできない。態度や行動からレッテルをはるだけでなく、その人らしさを形づくっている、内なる心のはたらきを把握しなければならない。

うぬぼれの深層を分析

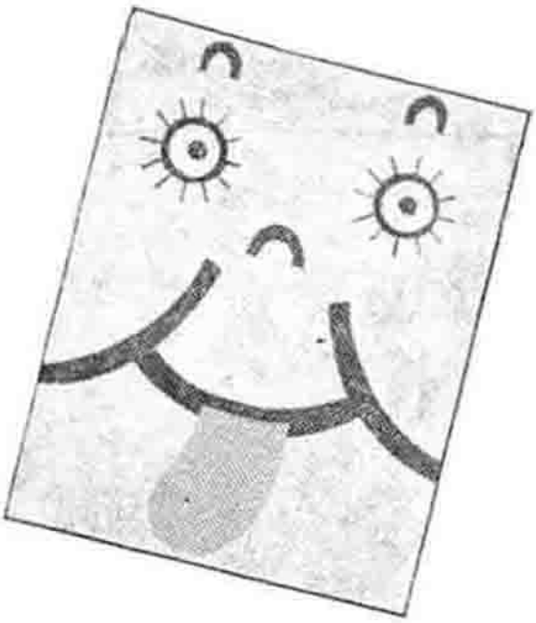
深層まで踏みこんで解き明かし、自分への違和感や悩み、挫折こそが自己理解と内面の成長をうながし、信頼と愛の人間関係をもたらす契機であると説く。

こだわり、

自己愛傾向、強迫傾向、自閉傾向、パラノイド傾向など、他者理解と自己分析の手がかりを、幼児体験、母子関係の、臨床例をもとに

甘え、

性格分析



小川捷之

講談社現代新書

性格分析
昭和五八年九月二〇日第一刷発行　昭和六三年六月二二日第一二刷発行
定価——五三〇円
著者——小川捷之
© Katsuyuki Ogawa 1983 Printed in Japan
発行者——加藤勝久　発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目三—二　郵便番号二三—〇一　電話〇三—九四五—二二一
装幀者——杉浦康平＋海保透
印刷所——凸版印刷株式会社　製本所——株式会社大進堂
ISBN 4-06-145704-7 (2)
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは、学芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

●目次

はじめに　3

1—心のはたらきと性格……7

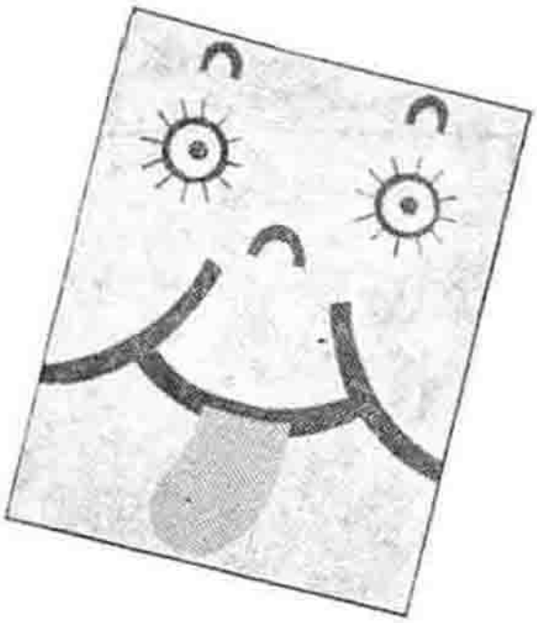
2—自分を見つめる……31

3—競争場面と人間関係……75

4—夫婦という人間関係……107

5—男らしさ・女らしさ……129
6—恋愛関係と甘え……159
7—自己規制の能力……179
8—現実を見つめる……201
9—母子関係と性格……213

性格分析



小川捷之

講談社現代新書

はじめに

「性格を通して人をどう理解するか」ということは、非常に古く、かつ新しい問題である。本書は、この課題を、心理臨床に携わる者が、実際のカウンセリング場面で接した事例を中心にまとめてみたものである。したがって、読者は、心理臨床家である私が、性格という観点から人間をどのように把握しているのかがおわかりいただけると思う。

書くにあたって心がけたのは、理論的構成より可能な限り具体的な事例にそって説明しようとした点である。それ故、理論面は他書で補っていただきたい。

次に心がけたことは、ここで紹介した事例のプライバシーを守ることである。その人となりが彷彿(ほうふつ)とするようにと思い、かなり細部にまでわたっている。しかし、これらの事例は、その人と特定できないように変容してあることをあらかじめお断りしておく。

事例のもとになった私のクライエントの人々に、ここで、深甚なる感謝を述べたいと思う。そして、本書の出版を企画された講談社の鈴木理氏にもお礼を申し上げる。

本書が読者の人間理解の参考に少しでもなればまことにありがたいことである。

一九八三年八月

小川捷之

●目次

はじめに　3

1—心のはたらきと性格……7

2—自分を見つめる……31

3—競争場面と人間関係……75

4—夫婦という人間関係……107

5—男らしさ・女らしさ……129
6—恋愛関係と甘え……159
7—自己規制の能力……179
8—現実を見つめる……201
9—母子関係と性格……213

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1—心のはたらきと性格

1——人さまざま

性格とは？

初対面の人と会ったときに、私たちはまず何を考えるだろう。「ずいぶん背の高い人だなあ」とか、「顔立ちのととのった美人だ」とか、「色が黒くて顔の四角い人だな」など、相手の風貌や身体の特徴にまっ先に着目する。

そしてその次に、相手の話し方や態度などから、「この人はとても陽気で朗らかだ」とか、「すごく神経質な人らしい」とか考えるにちがいない。

つまり私たちは、人と出会ったとき、ほとんど無意識のうちに、相手からの情報をまとめて、自分なりにその人のイメージを作りあげる。そのときになによりもものをいうのは、自分の今までの人間関係のなかから経験的に把握してきたカテゴリーである。いま目の前にいる人が、自分がこれまでに出会ったさまざまな人たちのなかの、どのタイプに属するかを考え、それによって、相手がどんな人物かという判断を下していくわけである。

では、私たちは人間についてのどんなカテゴリーを持っているのだろう。そこを考えてみる

と、どうやら外見的な特徴などよりも、「軽薄な人」だとか、「思慮ぶかい人」とか、「気の小さい人」などというように、そのほとんどが人がらに関することで人間を分類していることに気がつく。ということは、私たちが人間を理解する場合に、〝性格〟とか〝人がら〟といったものが、まさしくその人の〝人となり〟を表わすものであることを知っていて、無意識のうちに、その定規(じょうぎ)で人間をはかっているのである。

ところが、ここで問題にされている〝性格〟というものについて考えてみると、これほどはっきりと定義しにくい概念はない。オルポート(G. W. Allport)という有名な心理学者は、現在まで発表された〝性格〟に関する定義をいろいろと研究し、その結果、「性格とは、人がまさにあるところのものである」という、なんだかわかったような、わからないような定義をくだしている。それくらい、〝性格〟とはあいまい模糊(もこ)としたものなのである。

仮面の裏にあるもの

この〝性格〟に対応する英語に〝パーソナリティー(personality)〟ということばがあって、最近の心理学の教科書では、ほとんどがこのパーソナリティーという用語が使われている。

パーソナリティーというのは、ラテン語の〝ペルソナ〟からきたことばで、もともとは古典

劇の役者がつける〝仮面〟のことだといわれている。

そこで、性格をペルソナ(仮面)の意味にとってみると、性格とは、その人が自分の周囲の人びとに示す対社会的な顔であって、社会的役割に根ざしているものだと考えることができる。いいかえれば、性格とは他人によって認められた〝見かけ〟上の特徴だということにもなるわけである。

確かに、性格にはペルソナとしての部分があり、社会とのかかわりのなかで発展した、その人の個性だとも考えることができる。しかし、ペルソナがその人そのものを真に表わしているといえるだろうか。

ある芝居に、鬼の仮面をつけて悪事をはたらいていた人が、ついにはその仮面が顔から離れなくなって苦しむというストーリーがある。これなどはペルソナとその人との関係をみごとに表わしたものといえる。つまり、社会に対する〝見かけ〟であるはずのペルソナが、しばしばその人の本質になってしまうことがあるのである。だが、逆に考えれば、人間にはペルソナのほかに、内に秘められた本質的な部分があるということにもなる。

前にいったオルポートという人は、性格というものは、外側から見られる単なる行動とか活動ではなく、こうした行動の背後にあって、その行動を決定させるもの、として性格を考えて

いる。彼の考え方によれば、その人らしさを表わすものは、その人間の内に存在するダイナミックな体制であって、それが、その人らしさを表わす行動をおこなわせるのである。つまり、オルポートは、その人の独得の個性をもたらすものは、その人の内側にある何かであると仮定したのである。

このように、私たちが人の性格を考える場合、表面に表われた態度や行動だけを分類したり、類型化するだけでは、その人の性格を真にとらえたことにはならないのである。それよりも、こうした態度や行動の背後にあって、その人らしさをもたらしているものについて、把握することが必要なのである。

2——心の世界

自分のメガネ

ロールシャッハ・テストというのをご存知の方も多いと思う。心理学者が心理臨床の場合によく使うもので、インクを紙の上にたらして作ったシミの模様を検査を受ける人に見せ、それが何に見えるか、何に思えるかをたずねていくテストである。

この検査をしていて面白いのは、使われる図版の模様は同じでも、その反応は、人によってまちまちということである。完全に同じ反応をする人は、まずひとりもいない。

たとえば、色彩にばかり注意を向けて、色のついたものをたくさん見る人がいるかと思うと、どの模様もすべて動物にしか見えないという人もいる。また、ある人は、図版の細かいところにばかりこだわり、全体を見渡すことができない。そうかと思えば、想像力がたくましくて、まるで物語でも作るように、次から次へといろいろなものが見えてくる人もいる。

このテストの図版は、きわめてあいまいな模様からできているので、どんなものが見えても不思議はないのだが、それにしても、その反応は、人によってびっくりするほど違っている。

人間は、一人ひとりみんな違ったメガネで世の中を見ている。このロールシャッハ・テストのように、同一の事態に直面しても、そのとらえ方は人によってまちまちなのである。

私たちは、人間はみんな平等なのだから、みんなが同じものの見方や考え方をしてもいいはずだと、つい考えてしまいがちであるが、じつは一人ひとりが、それぞれに違った認識の世界に生きているのである。

心的事実と客観的事実

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com